

公開講座「0歳からのコンサート ～歌の遊園地～」

—2年間の取り組み—

A Report of College Extension
 “Concert for Babies from the Age 0: Amusement Park of Songs”
 During the Past Two Years

葛西健治
 KASAI, Kenji

キーワード：声楽、アウトリーチ、親子イベント、コンサート運営、保育者養成

0. はじめに

2011年度以来、こども教育宝仙大学は社会貢献・地域連携活動の一環として「こども学・区民公開講座」を開催してきた。2013年度までの3年間は、専任教員による講演会を行っていたが、2014年度以降は趣を変え、クラシックの音楽家によるガラ・コンサートを開催している。

その初回となった2014年度は、大人を対象とした一般的な音楽のガラ・コンサートを企画したが、翌2015年度からは保育者養成校という本学の社会的意義に鑑み、0歳児を含む乳幼児・未就学児を同伴する親子を主な対象としたアウトリーチ・コンサートを企画し、内容の発展を図ってきた。

本稿では、これまでに実施した2回（2015年度、2016年度）の公開講座「0歳からのコンサート ～歌の遊園地～」の取り組みについて報告する。なお記述に当たっては、曲目構成や演奏時間等、コンサート本体の概括的な情報にとどまらず、公開講座の実現に係る運営面での様々なアプローチについても可能な限り取り上げていきたい。

1. 2015年度の取り組み

1.1. 企画概要

企画概要の主たる事項を以下に箇条書きする。

- ・日程：2015年11月21日（土）
- ・時程：開場／12時30分
 開演／13時 終演／14時30分（90分間）¹

- ・会場：こども教育宝仙大学 421教室（別途、412教室を保育支援室として開放）
- ・入場料：無料
- ・定員：100名（親子合わせて）
- ・出演：La BalenVoce（ラ・バレンヴォーチェ）＝志田尾恭子（しだお・やすこ、ソプラノ（1））、宮澤優子（みやざわ・ゆうこ、ソプラノ（2））、葛西健治（かさい・けんじ、テノール ※筆者）、大塚雄太（おおつか・ゆうた、バリトン）、大園麻衣子（おおぞの・まいこ、ピアノ）

コンセプトの柱は「生の歌声を体いっぱい感じてもらうこと」とし、子どもたちが途中で泣いても退席を促さず、会場への出入りは保護者の裁量に任せて自由にとすることとした。また、子どもたちに生の歌声を届けることはもちろんだが、子育てのために普段なかなかコンサートに足を運ぶことのできない親（大人たち）にも楽しんでもらうことを大切なコンセプトの一つとした。

日程は「芸術の秋」を踏まえて11月に設定した。平日ではなく土曜日の午後に時程を設定したのは、乳幼児・未就学児同伴の便を考慮してのことである。

一般的なガラ・コンサートは、休憩を含めて120分間程度の演奏時間が設定されるが、本コンサートは子どもの集中力を考慮して、やや短めの90分間とした。

会場の本学421教室（4号館2階）は、横1列が18席、最大で14列を展開できるロールバックチェアースタンド（移動観覧席）を備えた多目的ホールである。展開時には252名を収容できるホールとして式典や講演会の会場となり、収納時には中規模な体育館として「健康スポーツ実技」や「リトミック」の教場として利用されている。本コンサートでは、親子が床に座って（あるいは親が子どもを抱っこしながら）鑑賞することを想定し、移動観

覧席を全て収納して、舞台と客席をフラットな状態で一体化させることとした。

コンサートの途中でぐずったり、飽きてしまう子どもが現れることが想定されるため、会場と同じ建物の1階にある412教室を保育支援室として開放し、当日は保育を専門とする専任教員を常駐させることとした。保育支援室にはおもちゃやおむつ台を準備し、親子が気分転換や休憩を自由に行えるよう配慮した。なお、おむつ台は会場を出てすぐの廊下の空きスペースにも1台、目隠しを配置した上で設置した。

支援の充実と安全性、スペースの余裕を考慮した上で、定員は親子合わせて100名とした。

出演のLa BalenVoce (ラ・バレンヴォーチェ) は、筆者を含めた4名の声楽家と1名のピアニストからなる声楽アンサンブルである。2011年の結成以来、東京で7回、新潟で1回の公演を行っている。メンバーはいずれも国立音楽大学の出身者で、現在はそれぞれに演奏活動を行っている。本学の公開講座には2014年度から毎年出演している。

1.2. 運営概要

公開講座の企画・運営に関する事柄の多くについては、本学の公開講座実施委員長(専任教員)が担当した。その主な内容は、学内の調整(事務職員との連絡、出演者への謝礼に関する折衝等)、チラシ(A4版、片面カラー刷)の作成・印刷、当日配布プログラム(A4版三つ折、両面カラー刷)の作成・印刷、観覧希望者の取りまとめ(後述)等である。

広報に関しては本学ホームページにおける周知の他、宝仙学園関係者向け情報冊子『宝仙季報』第142号(平成27年10月23日発行)に案内が掲載された。

また本コンサートは「なかのまちめぐり博覧会2015」(主催:なかのまちめぐり博覧会実行委員会・中野区、期間:2015年10月31日~11月29日)のイベントの一つにエントリーされ、当該パンフレットにも案内が掲載された。

観覧希望の申込方法はメールまたはFAXとし、氏名、連絡先、子どもの有無、子どもの年齢を明記してもらうこととした。窓口は公開講座実施委員長が務め、本番の約1週間前に当たる11月13日を締め切り日とした。

出演者とのやり取りに関する実務的な事柄(日程調整、練習場所の確保やその周知等)については、出演者の一人でもある筆者が取りまとめを行った。また曲目構成を含めたコンサート全体のプログラミングについても筆者が中心となって調整、決定を行い、前日の会場設営を含めた実施要項(A4版、両面刷り1枚)及びアンケート用紙(A4版、片面刷り1枚)も筆者が作成した。

1.3. 会場設営

本番前日の2015年11月20日(金)は大学の通常授業日であったが、会場となる421教室及び保育支援室となる412教室が第4限(14:40~16:10)以降使用予定がなかったため、その間に会場設営を含めた事前準備を実施した。

設営は専任教員3名及び1年生(当時)の有志が担当し、ヨガマットやじゅうたん、パイプイスの設置、空調(エアコン)の確認、マイクの準備、アップライト・ピアノの移動、卓球台の移動、おむつ台の設置等を行った。

設営完了後の会場(421教室)のレイアウトを、以下図1に示す。

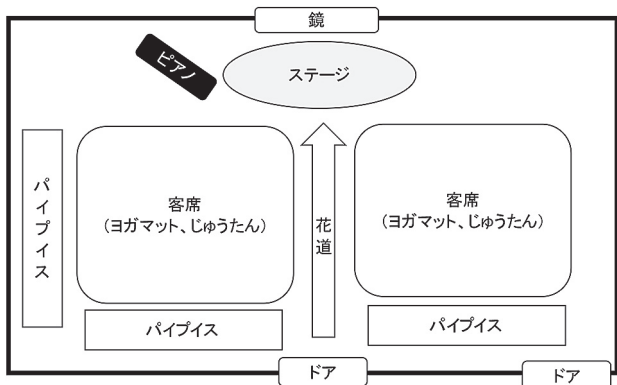


図1 会場のレイアウト

客席(床)にはヨガマットとじゅうたんを敷き、広いスペースを確保した。その後方及び下手側に、パイプ椅子を30脚程度設置した。出演者と観客との一体感を演出すべく、あえて客席中央に目抜き直線スペースを作り、そこを出演者が出入りする花道とした。またステージの奥行きを広く見せることを企図して、壁に備え付けられている鏡を開放した。アップライト・ピアノの位置等を含むステージのレイアウトは、出演者が事前練習において協議、決定したものである。

おむつ台等、会場外のレイアウトについては公開講座実施委員長に一任した。

1.4. 当日の記録

1.4.1. 会場運営(役割分担)

当日、会場運営に携わったのは専任教員2名、事務職員3名、1年生(当時)の有志学生10名であった。以下にその主な役割分担と担当者数の内訳、業務内容を記す。

- ・玄関係(事務職員1名、学生2名): 駐輪場の案内、ベビーカーの整理、受付への誘導
- ・受付係(事務職員1名、学生3名): 予約来場者のチェック(記帳)、プログラム配布、アンケート配布・回収

- ・会場ドア係（学生2名）：上履き持込用ビニール袋の配布、スリッパ配布、必要に応じてのドアの開閉
- ・会場係（事務職員1名、学生1名）：客席への案内・誘導、演奏時の入場整理（途中来場者への対応）
- ・保育支援室（412教室）担当（教員1名、学生2名）
- ・司会及び出演者紹介（教員1名）
- ・ビデオ及び写真撮影（事務職員1名）：主に広報用の写真撮影

業務内容の多寡については当然ながら時間差が生じるため、担当者はそれぞれの役割分担を越えて適宜フォローし合いながら運営がなされた。

1.4.2. タイムスケジュール

全体運営に係る当日のタイムスケジュールを、出演者の動きを中心に、以下表1に示す。

表1 タイムスケジュール (2015年11月21日)

9:00	ピアノ調律（～10:30）
10:00	出演者楽屋（422教室）入り、会場確認
10:30	G. P. ² 開始
12:00	G. P. 終了 → 昼食、メイク、着替え等
13:00	開演
14:30	終演 → 着替え等
15:15	撤収完了

ピアノは前日までに舞台への移動が完了されており³、調律は当日の朝、G. P. 開始直前に行われた。

G. P. は本番と同様に90分間の時間を取り、滞りなく進められた。

終演後、出演者は来場者の見送りや挨拶等を行い、適宜着替え等を済ませて15時15分に撤収を完了した。その間、受付ではアンケートの回収が行われ、並行して教員や事務職員、学生有志が会場の後片付けを行った。なお、乳幼児・未就学児の退席には時間がかかることが予想されたため、後片付けは焦らずにゆったり行うよう、予め周知がなされた。

1.4.3. プログラム（曲目構成）と実演の記録

次に、開演から終演までのコンサート本体について記述する。

プログラム（曲目構成）は以下、表2の通りである。

表2 プログラム（曲目構成）(2015年11月21日)

■プレステージ（5分間）	
エプロン・シアター	（学生有志2名）
■第1部（15分間）	
歌のメリーゴーラウンド	（全員）
野ばら／シューベルト	（Ten.）
からたちの花／山田耕筰	（Sop. 1）
忘れな草／デ・クルティス	（Sop. 2）
もう飛ぶまいぞこの蝶々／モーツァルト	（Bar.）
（歌劇《フィガロの結婚》よりフィガロのアリア）	
休憩①（15分間）	
■第2部（20分間）	
猫の二重唱／ロッシーニ	（Sop.1, Ten.）
あわて床屋／山田耕筰（岩河智子 編作）	（Ten.）
電話／湯山昭	（Bar.）
田舎娘になるときは／ヨハン・シュトラウスⅡ世	（Sop. 1）
（喜歌劇《こうもり》よりアデーレのアリア）	
オー・ソレ・ミオ／ディ・カプア	（Sop. 2）
休憩②（15分間）	
■第3部（20分間）	
童謡メドレー「いつの日か」より抜粋／源田俊一郎	（全員）
（編曲）	
（アンコール）	
さんぽ／久石譲	（全員）

- ・各行の内容は「曲名／作曲者（歌唱担当者）」の通りである。
- ・歌唱担当者はパート名の略記で記載した。

学生有志2名によるエプロン・シアターの後、ラ・バレンヴォーチェの4名は1曲目《歌のメリーゴーラウンド》を歌いながら、花道を通して入場した（ピアニストは板付き）。なお歌手4名はそれぞれ1枚ずつ、色違いのスクarfを手に持ち、音楽に合わせて適宜振りながら入場するという演出を行った。入場の後、簡単な自己紹介を兼ねたMCを挟み、その後は芸術歌曲やカンツォーネ、オペラ・アリア等のソロを1曲ずつ、いずれも原語で演奏した。第1部の構成に当たっては、シンプルかつ演奏時間の短い作品を選曲するよう心掛けた。

第2部は全体の演奏時間をやや長めの20分間に設定し、ドラマ性もしくはストーリー性の高い作品を中心に選曲を行った。冒頭の《猫の二重唱》は、歌詞が全て猫の鳴き声の模写（ミャウ miao）によるユニークな作品である。本コンサートではオス猫（Ten.）とメス猫（Sop. 1）によるエサ（魚）の奪い合い、というシーン設定を行い、猫の耳を模したカチューシャや魚をかたどった小道具等を用いて、コミカルな演技を交えながら演奏した。その後は歌手4人全員が一旦ステージに登壇し、第2部で歌わ

れるそれぞれの演奏曲について簡単に解説した。そのため《あわて床屋》以降の4曲はMCを挟むことなく、続けて演奏した。

第2部最後の曲目《オー・ソレ・ミオ》の演奏後、再び全員がステージに登壇し、あいさつと共に、第3部の演出について簡単に説明を行った。

第3部では、第1部の入場の際に歌手が手に持っていたスカーフを、今度は客席の来場者全員に配布し、童謡メドレーの演奏中や曲の合間に会場全体で一緒に振ってもらう、という演出を行った。スカーフの配布は休憩②の間に、有志学生らによって行われた。

童謡メドレー「いつの日か」より抜粋した曲目は《しゃぼん玉》《ゆりかご》《七つの子》《夕焼け小焼》《狸ばやし》《汽車》《汽車ぼっぼ》《どんぐりころころ》《里の秋》《赤とんぼ》の延べ10曲で、演奏時間は15分弱に及んだ。当日の季節感(秋)や音楽的なヴァリエーションを考慮して抜粋したものである。

アンコールは子どもたちにもおなじみのアニメ映画「となりのトトロ」から《さんぽ》を選曲した。観客にも手拍子を促しながら、会場全体をぐるりと行進しながら演奏し、大きな盛り上がりと一体感のうちにコンサートの幕を閉じた。

なお定員は100名としていたが、予想以上に観覧希望者が多く、予約段階では親子合わせて126名を受け付けていた。しかしながら、実際の来場者数はその3分の2(約64%)に満たない81名であった。

1.5. 反省と課題 (アンケートの回答を踏まえて)

2015年度の取り組みについての反省と課題を、当日回収することのできたアンケート(27枚)への回答を踏まえて検討していきたい。アンケートでは9つの項目を設け、項目1~7では来場者の属性(性別、年齢、居住地等)や広報媒体等について、チェック形式で回答してもらったが、本項では運営や企画内容の改善点の洗い出しを主たる目的とするため、自由記述欄である項目8(良かった曲目)及び項目9(意見、感想等)への回答を中心に、適宜引用しつつ検討を行うこととする。なお引用については回答者の記述をそのまま表記する。

項目8(良かった曲目)の内容を回答数の順に並べると、《童謡メドレー(9)》《さんぽ(7)》「すべて(6)》《猫の二重唱(4)》《オー・ソレ・ミオ(4)》「第1部のクラシックの曲(オペラ)(3)》《電話(1)》《歌のメリーゴーラウンド(1)》となった(括弧内の数は回答数)。

出演者の実感としては、第3部では子どもたちの集中力が途切れてしまっていたような印象があり、抜粋とは言え約15分間の演奏時間を要する《童謡メドレー》は、コンサート終盤には不向きだったのではないかと反省し

ていたが、アンケートの結果を見ると、その意に反して、最も良かった曲目として受け止められていたことがわかった。自由記述欄には「自分が歌えない汽車の歌を唄っていただき感動しました」というコメントがあり、現代では歌われる機会が減少している唱歌や童謡を、このようなアウトリーチ・コンサートの曲目として取り上げたことに、一定の評価と意義があったことを確認することができた。

それに次ぐ回答数を得たのはアンコールの《さんぽ》であった。《童謡メドレー》《さんぽ》はいずれもコンサート終盤に演奏された曲目であるが、それらに共通していたのは、実演の中で、客席参加型の演出を行ったことである。《童謡メドレー》では前述の通り、演奏に合わせてスカーフを振ってもらうよう促し、《さんぽ》では行進曲調の音楽に合わせて、観客に手拍子をしてもらった。《さんぽ》以下の回答にはクラシックの曲目が続いており、プロの演奏を「鑑賞する(子どもに鑑賞させたい)」というニーズが確かに存在していたことが窺える。だが一方では、親子と一緒に音楽に「参加したい」というニーズが多く存在していたことが、アンケートの結果に滲み出ているように思われる。「体を動かす曲があると楽しそうです」「たいこもあれば、もっと興味をひきそうです」等のコメントは、更なる参加型演出への要望である。

しかしながら、今回試みたスカーフの演出には功罪があった。スカーフによって会場との一体感が高まった反面、単純にそれをおもちゃにしてしまい、音楽から離れてスカーフ遊びに夢中になってしまう子どもが多数現れてしまったのである。またステージの奥行きが広がりを企図して開放した後方の鏡も、スカーフと同様に、コンサート後半では子どもたちのおもちゃと化してしまい、音楽(鑑賞)への集中を削ぐ結果となってしまった。「0才からなので、会場の雰囲気もアットホームな感じではなかったと思いますが、少し年齢の高い子が走り回っていたのは気になります。泣き声などは、ほほえましいものです」というコメントには、親子イベントとしてのアウトリーチ・コンサートのコンセプトに関わる課題が示唆されている。

最後に運営面を振り返ると、スリッパが不要であったこと(コンサート中はほとんどの観客がヨガマットに座っていたため)、またアンケート記入のための筆記具の貸し出しが必要であったこと等が今後の改善点として挙げられた。また126名の予約がありながら、実際の来場者数が81名に止まってしまったが、これは無料であるために簡単にキャンセルが効いてしまうという要因と、子どもの急な体調の悪化によって、当日になって来場を見合わせざるを得ない親子が多く発生してしまうという、親子イベント特有の要因が重なったためであると考えられ

る。大学の公開講座として実施しているため、入場料無料の方針については変更の予定はないが、予約者数については、今後も定員の2割強程度を受け入れても支障がないように思われる。

2. 2016年度取り組み

2.1. 企画概要

まずは前回と同様に、企画概要の主たる事項を以下に箇条書きする。

- ・ 日程：2016年11月27日（日）
- ・ 時程：①開場／12時30分
開演／13時 終演／13時45分（45分間）
②開場／14時
開演／14時15分 終演／15時（45分間）
- ・ 会場：こども教育宝仙大学421教室（別途、401教室を保育支援室として開放）
- ・ 入場料：無料
- ・ 定員：各回100名（延べ200名、親子合わせて）
- ・ 出演：La BalenVoce = 志田尾恭子（ソプラノ）、葛西健治（テノール ※筆者）、大塚雄太（バリトン）、大園麻衣子（ピアノ）

2016年度の取り組みは、大枠では2015年度のものに踏襲している。企画のタイトル、コンセプトに変更はなく、日程を土曜日から日曜日に変更したものの、前回と同様に11月下旬の週末に設定した。会場も同じく421教室を使用し、レイアウトも同様とした。

大きく変更した点は、時程である。前回は2回の休憩（各15分間）を含めて全体を90分間としていたが、今回は全体を前年比の半分の45分間とし、その代わりに、同日に全く同じプログラムで2回の公演を行うこととした。そもそもこの企画では、演奏中の出入りを自由としているため、今回は敢えて改まった休憩時間を設定せず、演奏者によるトークをゆるやかに挟みながら、一気に45分間のプログラムを進行することとした。また2回公演にすることにより、より多くの観覧希望に応えることができると考えた。

出演のLa BalenVoce（ラ・バレンヴォーチェ）は、ソプラノの宮澤が産休により出演を見合わせたため、今回は彼女を除く4名で演奏を行うこととした。

2.2. 運営概要

企画・運営に関しては前回から大きな変更はなく、主たる事柄は公開講座実施委員長が引き続き担当した。

広報については本学ホームページの他、昨年について

「なかのまちなめぐり博覧会2016」（主催：なかのまちなめぐり博覧会実行委員会・中野区、期間：2016年10月22日～11月27日）のイベントの一つにエントリーされ、当該パンフレット48ページに案内が掲載された。

観覧希望の申込についても前回の方法を踏襲し、申込期間は10月1日から11月21日までとした。

2.3. 会場設営

今回は保育支援室を401教室（地下1階）に設けることとし、設営は当日の午前中に有志学生らが行うこととした。

コンサート会場（421教室）については、本番2日前の11月25日（金）9時から準備のために専有使用することができたため、その日のうちに設営のほとんどを済ませることができた。

レイアウトも前回（図1）をほぼそのままに踏襲したが、子どもたちのおもちゃと化してしまったステージ後方の鏡については、今回は使用しないこととした。

2.4. 当日の記録

2.4.1. 会場運営（役割分担）

当日、会場運営に携わったのは専任教員2名、事務職員3名、有志学生7名であった。有志学生は4年生（当時）を中心に、今回は学年の隔てなく参加の申し出があった。

役割分担については人数配置に多少の異同はあったものの、内容は前回とほとんど同様であった。前回からの変更（改善）点としては、スリッパ配布の中止、アンケート回答用の筆記具（ボールペン）の貸し出しの2点が挙げられる。

2.4.2. タイムスケジュール

全体運営に係る当日のタイムスケジュールを、出演者の動きを中心に、以下表3に示す。

表3 タイムスケジュール（2016年11月27日）

9:00	ピアノ調律（～10:30）
10:00	出演者楽屋（422教室）入り、会場確認
10:30	G.P. 開始
11:30	G.P. 終了 → 昼食、メイク、着替え等
13:00	公演① 開演
13:45	公演① 終演 → 来場者見送り等 （観客の入れ替え）
14:15	公演② 開演
15:00	公演② 終演 → 来場者見送り、着替え等
15:45	撤収完了

調律の時間、G. P. 開始時刻は前回と同様であるが、今回はコンサート本体を45分間に設定したため、G. P. 自体は確認等を含めて60分程度で終えることができた。

公演①の終演時間(13:45)と公演②の開演時間(14:15)の間には30分間程度の時間しかなかったものの、観客の入れ替えは大きな混乱もなくスムーズに行われた。

2.4.3. プログラム(曲目構成)と実演の記録

プログラム(曲目構成)は以下、表4の通りである。前述の通り、公演①、公演②は共に全く同じプログラムで行われた。

表4 プログラム(曲目構成)(2016年11月27日)

歌のメリーゴーラウンド	(全員)
「どうぶつのうた」	
ぞうさん/まど・みちお 團伊玖磨	(Bar.)
やぎさんゆうびん/まど・みちお 團伊玖磨	(Ten.)
ことりのうた/与田準一 芥川也寸志	(Sop.)
いぬのおまわりさん/佐藤義美 大中恩	(全員)
「童謡メドレー2」より/源田俊一郎(編曲)	(全員)
どんぐりころころ、大きな栗の木の下で、ひげじいさん、おもちゃのチャチャチャ	
おいらは鳥刺し〜恋人か女房か(抜粋)/モーツァルト	(Bar.)
(歌劇《魔笛》よりパパゲーノのアリア)	
パ・パ・パ/モーツァルト	(Sop., Bar.)
(歌劇《魔笛》よりパパゲーナとパパゲーノの二重唱)	
君を愛す/ベートーヴェン	(Ten.)
私のお父様/プッチーニ	(Sop.)
(歌劇《ジャンニ・スキッキ》よりラウレッタのアリア)	
世界中の子どもたちが/中川ひろたか	(全員)
さんぽ/久石譲	(全員)

- ・各行の内容は「曲名/作曲家(歌唱担当者)」の通りである。
- ・「どうぶつのうた」の4曲のみ、演奏意図(後述)に基づいて作者名も記載した。
- ・歌唱担当者はパート名の略記で記載した。

今回はプレステージを設けず、《歌のメリーゴーラウンド》でコンサートの幕を開けた。

前回と同様にピアニストは板付きで前奏を開始し、歌手3名が歌いながら花道を通して入場した。

今回は《歌のメリーゴーラウンド》に続いてクラシック作品を1曲ずつ、計4曲演奏する、という流れであったが、今回は動物に因んだ子どもの歌をそれぞれ1曲ずつ演奏し、最後に3人揃って《いぬのおまわりさん》を歌って締め括る、という流れにした。子どもの歌は、と

かく保育の現場では簡易伴奏もしくは馴れ合いの中で弾き崩された伴奏をもとに歌われてしまうことが多いが、この「どうぶつのうた」で演奏する4曲については、敢えて歌、伴奏共にオリジナルの楽譜に忠実に演奏することを心がけ、そのために、信頼に足る校訂を経た楽譜を用いることとした⁴。

子どもの歌はいずれも演奏時間が短く、単独で演奏するだけでは間が空き過ぎてしまうため、ピアニストが即興で曲間に音楽を挿入し、全4曲を一連の流れで演奏することとした。なお、それぞれの曲間(歌手の入れ替わりの場面)では、互いに次の曲の紹介を行う等、簡単な台詞を交えながら進行した。

続く「童謡メドレー2」は、同声2部によるシンプルな編曲が施された作品である。今回はソプラノ、テノール、バリトンがそれぞれ1名ずつという変則的な編成であったが、同声2部の編曲は音楽的な制約が緩やかなため、適宜、歌唱部分の編曲をアレンジしながら柔軟に演奏を展開することができた。前回のアンケート結果から、観客の参加型演出の拡充が課題として挙げられたため、今回は《大きな栗の木の下で》《ひげじいさん》《おもちゃのチャチャチャ》の場面において、手あそびや手拍子による参加を大いに盛り込んだ。

参加型演出を通して会場全体の空気が程良くほぐれたところで、いよいよクラシック作品の演奏に移行した。

モーツァルトの歌劇《魔笛》では、鳥のオウムをモチーフとしたキャラクターであるパパゲーノとパパゲーナが活躍するシーンが多くあるが、それらのシーンは、展開の簡明さと音楽の親しみやすさによって、このような親子イベントの曲目としてしばしば取り上げられている。

原語はドイツ語だが、今回は簡単な小道具(鳥の羽を模したアクセサリー)と演技を交えながら、日本語訳詞で演奏することとした。パパゲーノの2曲のアリア《おいらは鳥刺し〜恋人か女房か》(抜粋)に続けて、パパゲーナとの二重唱《パ・パ・パ》を演奏した。なおオウムのキャラクターの登場は、先に演奏した「どうぶつのうた」との親和性も企図してのことである。

二人の恋の成就が歌われる《パ・パ・パ》を受けて、次は夫婦の愛情をテーマとした芸術歌曲《君を愛す》を演奏した。こちらも平明な中に愛情溢れる音楽が織り込まれた作品であるが、言語の相違を超えた音楽の力(ここでは一連の愛情の表現)を、特に子どもたちに伝えたいという思いから、敢えて原語のドイツ語で歌唱することとした。

クラシック作品の最後は、今回唯一のイタリア・オペラのアリア《私のお父様》を選曲した。ソプラノが奏でる流麗な旋律と、アルペジオを中心とした伴奏部の音楽は演奏効果が高く、かつ3分間に満たない演奏時間のコ

コンパクトさから、今回の親子イベントに相応しいとの選曲であった。こちらも原語のイタリア語で歌われた。

全体の締め括りには、前回のアンコールとしても好評だった《さんぼ》に加え《世界中のこどもたちが》を選曲し、2曲続けて全員で演奏した。どちらも行進曲調の4/4拍子で、手拍子のしやすい作品である。《世界中のこどもたちが》はステージ上で演奏し、《さんぼ》では前回と同様に観客に手拍子を促しながら、会場全体をぐるりと行進しながら演奏した。

公演①は予約者数99名に対して来場者数は86名、公演②は予約者数101名に対して来場者数は63名であった。全体としては、予約者数(200名)に対する来場者数(149名)の割合は74.5%であった。

2.5. 反省と課題（アンケートの回答を踏まえて）

今回は公演①で25枚、公演②で27枚、合計52枚のアンケートを回収することができた。アンケートの質問項目については前回からいくつか修正を施したが、本項の記述に当たっては前回に倣い、自由記述欄である項目8（意見、感想、今後のリクエスト等）への回答を中心に、適宜引用しつつ検討を行うこととする。なお引用については回答者の記述をそのまま表記する。

前回から一貫する、本コンサートのコンセプトに関しては「いつもTVやCDで聞くような歌が生で聴けて（しかもオペラ歌手！）すごく子どもが喜んでいました」「気兼ねなく動き回れたので良かったです」というような、好意的なコメントが寄せられた。「生の歌声を体いっばい感じてもらう」「子どもたちが途中で泣いても退席を促さず、会場への出入りは保護者の裁量に任せて自由にする」というコンセプトは、揺るぎなく継続していく価値があるように思われる。

前回からの大きな変更点である、コンサート全体の時間の短縮（45分間）については、「時間もあきず、調度よかったです」「子どもには調度よい時間配分と長さでした」等、概ね好意的に受け止められたようである。一方でリピーターからは「もう少し長く、去年みたいな構成が良いです」との意見も寄せられ、改善の難しさも示唆された。

前述の通り、今回は参加型演出の拡充に努めたが、アンケートでは「子供も手をたたいたり、たくさん動いたり…一緒に唄えるのはとても楽しく、手あそびもあったのであきなかったようです」「一緒に手あそびできる曲は楽しかったです」「うたあそびがたのしかったです」等の意見が多く寄せられ、改善の奏功が見受けられた。

今回、特に多く寄せられたのは「子育てのために普段なかなかコンサートに足を運ぶことのできない親（大人）たちにも楽しんでもらいたい」という、この企画のもう

一つ大切なコンセプトに関わるコメントであった。「子どもも大人も楽しめて、とてもよかったです。大人がコンサートになかなか行けないことまで考慮してくださっていて、素晴らしいと感じました」「このような機会はなかなかないので親子共々とても楽しめました」「大人も久しぶりの本格的なオペラにうっとりしてしまいました」「親の気分転換にもなりました」「コンサートはおとなも子どもも楽しめる曲でよかったです。ひさしぶりにコンサートに行けました」「親になってからコンサートにも行けなくなったので、無料ですてきなオペラが聴けてうれしかったです」「本物のオペラを見られて子供以上に大人が満足しました」等、企画者側の思いと観客側のニーズが一致したコメントが多く寄せられ、大変嬉しく、ありがたく受け止めている。

来場者数は前述の通り、予約者数(200名)の74.5%に当たる149名であったが、今回は公演を2回行ったため、総数としては前回は63名上回り、割合は約1.7倍増となった。

3. おわりに

2015年度に初めてこのコンサートを企画した際、まず驚いたことは、予想を超えるニーズの高さであった。予定していた定員の100名はあっという間に埋まり、その後も次々に寄せられる予約を泣く泣く断らざるを得ないという状況であった。実際には既述の通り、初回、2回目共に多くの当日キャンセルがあったが、それでも実に多くの親子が会場に足を運んで下さった。

筆者は常々、表現者としての音楽家たる自分が、保育あるいは保育者養成において、何を、如何に貢献し得るのかという課題意識を抱えているが、その答えの一つが、このようなアウトリーチ活動における取り組みの中に、確かに存在しているように感じている。まだまだ経験の乏しいところではあるが、改善の実施を含んだ2年間の取り組みを通して、音楽、歌、演奏表現の意義、原点について、大いに示唆を得た。この経験は、筆者にとっては取りも直さず、保育者養成における教育活動の糧となるものである。

今後は全国で様々に展開されている親子向けのアウトリーチ・コンサートの情報を収集、参照しながら、本学における「0歳からのコンサート」を可能な限り継続し、更に発展させていきたいと考えている。

注

- 1) チラシ及び当日配布のプログラムの表紙には「終演 15時(15:00)」と記載されていたが、これは誤り。「なかのまちめぐり博覧会 2015」のパンフレット44ページには

「13:00～14:30」と明記されており、こちらが正確な時程である。

- 2) General Probe ((独)ゲネラル・プローベ=舞台総練習)の略。
- 3) 421教室(体育館)のアップライト・ピアノは通常、壁際に置かれた状態で使用されているが、コンサートの会場レイアウトの都合上、前日の設営において図1の場所に移動された。
- 4) 筆者の検討に基づき、いずれの楽譜も『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌——唱歌童謡140年のあゆみ』全国大学音楽教育学会 編(音楽之友社)に拠った。